

# カントと現代の科學

戸坂潤述

J. V. Kriesの「カント、及び現代の自然研究に對するカントの意味」の要領を紹介して見やうと思ふ。之はカント二百年記念に際して出版されたカント文献の内でも偉出したものゝ一つに數へられるさうであるが、論じられた諸問題には豊富な内容的知識が含まれてゐると共に吾々にとつて寧ろ興味ある種々の疑問が無くはないかと考へられる。私は之に對して批評を下すことは敢てしないがその代り之を出来るだけ簡單に要約して讀者への問題としたいと考へる。

× × × ×

## 一、自然研究者としてのカント

カントと現代の科學

カントは獨り哲學界に不朽の功績を残したばかりではなく自然科學者としても重大な位置を占めるものである。その最初の論文「活力の眞の計算の考へ」はデカルトとライブニッツとの相反撥すると考へられた二つの見方に就いて論じたものであるが、其は獨自の思想といふ點に於けるよりも寧ろ嚴密な鋭利な或ひは煩瑣とも云ふべき批判の傾向と能力とを示したといふ點に於て價值があるであらう。之に反して「地球の回轉は時の經つに従つて其速さを變へるか」に就いてのベルリン・アカデミーに提出された懸賞論文はカントの獨創的天才を示すものである。カントによれば月及び

太陽の引力によつて引き起こされる潮の満干の運動が地球の迴轉の速さを緩める事が明かとなる。たとへその計算があまり嚴密ではなかつたにしても、又たとへ速さがこの外の更に多くの原因によつて緩まるといふことをカントは注意しなかつたにしても、カントが簡單な疑ふことの出來ぬ力學的關係の考察から出發したといふ點での此論文の價値は依然として變るものではない。さて自然科學者としてのカントをして最も有名ならしめるものは「一般自然及び天體論」に述べられた所謂カント・ラプラス假説である。凡ゆる遊星は畧同一平面の内に同一の方面を以て運動し太陽も又この平面に垂直な軸の廻りを同じ方向に迴轉するが、カントによればかゝる偶然とも云ふべき一致は太陽と遊星とが本來空間に擴つてゐた同一の物質であり、後に到つて始めて分離したものであるといふことを示すに外ならない。勿論カントが太陽系の

成立を説明して引力と排斥とが密度の大きい多數の塊を造り同時に又全體に迴轉運動を與へるとしたのは誤りである。後者は力學上不可能でありラプラスの如きは迴轉運動は始めから與へられたものと見た。併し此點を除いてはたとへ今日に到るまで天牀の發達史の確實な見方が得られないためにこの假説が如何なる範圍に於て正當であるかを決定することは出來ぬとしても、この假説の核心そのものゝ正しい事は疑ふべくもない。風の理論その他に關するカントの仕事を數へ盡すことは茲では不可能であるであらう。たゞ最後に生物界に就いての研究を一言しなければならぬ。カントは嘗つて有機體の形態が不變であるか變化し得るかの問題を考察したことがあるがそれは「種々なる人種に就いて」にも論じられてゐる。又後に到つて今日の進化論の思想を單に漫然とではなく實に疑ふ餘地のない程明かに述べてゐる。たゞそれが

あまり知られないのはカントがこの問題を獨立に論せずたゞ判斷力批判の處々で觸れてゐるに過ぎないためでもあらう。孰れにしてもカントの自然科學上の仕事の特徴を明かにすればそれは彼が主として思想家であつたといふ處にある。而も彼は與へられたる事實を銳利に確實に追求する思想家であるばかりではなく又自由な創造の想像力によつて廣汎な世界に住し既知のものから前人未發の眞を見出して科學の研究に新しい刺戟を與へる底の思想家であつたといふことにあると思ふ。

## 二、カントの數學の説

カントの最も一般的な思想の一つは吾々の精神生活の内に這入る凡てのものは吾々の意識の内に與へられねばならぬといふことである。「主觀性」とは之である。然るに吾々の意識の見渡し得ない程の多様の内吾々の知覺の或る特殊のものは常に不變であり、經驗の或る特徴は必然性と嚴密な一

般性を持つてゐる。さて感性知覺の空間的な形式は之に屬するものであり、カントはまづかゝる意味に於て空間はアプリアリな必然的表象であるといふ。吾々はかゝるアプリアリをアプリアリの概念の心理發生的解釋と呼ぶ。併しこのアプリアリテートを個々の對象が互ひに順序づけられて現はれる現はれる方即ち視覺の optische Lokalisation と考へるならばヘルムホルツがカントを攻撃したやうにかゝるアプリアリテートは明かに否定されねばならぬ。吾々の今アプリアリテートと呼ぶものは之とは異つて一般に感性的知覺は空間的な形式をとるといふ意識の性質、即ち空間表象は始めから與へられた不變な意識内容を表はすといふことではなければならぬ。併しカントのアプリアリは單に之だけでは盡されない。寧ろ多くのカント學徒によればカントのアプリアリ説は心理發生的な意味でのアプリアリではなくして論理的な關

係を取り扱ふものなのである。吾々の知識の種々なる部分の間にその妥當の論理的な關聯があるといふことを主張するものなのである。それ故ある命題に論理的なアプリアオリテートがあるとはそれが經驗の特殊の内容から論理的に獨立であり、その妥當が經驗内容に依らずして他種の明白さを持つてゐるといふことである。かゝる意味でのアプリアオリテートならば、或は概念や表象のアプリアオリテートなどは云ふことは出來ない。論理的アプリアオリテートはたゞ判斷に就いてのみ云ひ得ることである。それ故たゞ空間に關する一定の命題、即ち幾何學の公理のみが論理的アプリアオリテートを持つ得る筈である。そしてこの公理の持つ明白さは空間表象の性質そのものに基く明白さなのである。それ故この場合の判斷は、分析的ではなくして、Reflexionsurteilと謂はれるであらう。吾々はかくして空間表象のアプリアオリテートの二種を嚴に

區別せねばならぬ。

空間表象と同じく時間表象に就いても繼起するものから區別された時間的、規定、あらゆる出來事の不變な基礎となる時間のアプリアオリテートを考へることが出来る(心理發生的)。それと共に又經驗の特殊な内容から論理的に獨立な命題を考へることも出来る。勿論この命題は分析判斷と呼ばれるものではなくして時間表象の特殊の性質にその基礎を得る反省判斷である。例へば過去と未來への無限の同様な擴りととか、それが完全に同様な部分から成立してゐるとか、はそれである。(論理的)。

數の表象に就いては數はまづ第一に固定した與へられた意識内容であり數へられるものゝ内容と共に變り得ないものである(心理發生的)。次に數論の公理的な基礎と雖も數の間の關聯と關係との云ひ表はし即ち反省判斷と見られねばならぬ。例

へば  $(a+b) + 1 = a + (b+1)$  といふ命題は順次の關係と同等の關係との關聯を云ひ表はすものである(論理的)。ジョン・スチュアート・ミルの如く數論の命題をば實在界の對象を數へることから歸納的に一般化された經驗の成果と見るのも、多くの人々のなすやうにそれを純論理的な性質に基くとして分析判斷の特殊の形と見るのも、數論の論理的な基礎が數の表象それ自身とその心理的な性質との内に求められねばならぬことを忘れた點に於て不當であると思はれる

既に述べたやうに感性知覺が感覺とかの不變なる表象(數、時間、空間)との綜合を意味する以上、數學が一般にかくの如き反省判斷であるならば、數學の對象たるかゝる不變の内的關係及び關聯は凡て知覺に適應せねばならぬことは明かである。(カントが數學は經驗を支配するといふ時、カントは實は經驗と知覺とを相即してゐるのであるが

この相即は少くとも疑問でなければならぬ)

カントが「外感」の形式と呼ぶものは感性知覺が常に空間的な關係に於て與へられるといふことを意味するのであるがそれには未だ個々に就いて知覺、空間的な順序が何であるかは考へられてゐない。直接に與へられたる空間關係の知覺は考へられてゐない。今カントにこの點を感覺生理學の立場から補ふならば、直接に與へられたる知覺の形式としての空間及び時間と、所謂客觀的に現實されたる實在の表象乃至思惟としての、終局的な思惟上の實在認識の形式としての時間及び空間とを區別し得るであらう。カントは知覺の感覺生理學的内容をその考察の内に入れる機會を持ち得なかつたが故にこの兩者の區別を明かにすることが出来なかつたと云はねばならぬ。而して一般にかくの如く直接の知覺と區別されたる終局的に思惟されたる(客觀的に實現されたる)ものによつて實在

認識の全體的な形式「全體的な世界形像」が成立するのである。而して實現されたるものとはある一般的な合法則性に對應するものを云ふのである。それ故實在の認識とは事實上與へられた體驗を合法的に順序づけられた全體の一部分として云ひ表はし又理解するこの「全體的な世界形像」のことに外ならぬ。それ故吾々が感覺生理學の事實をとり入れる時カントの空間及び時間の思想の上に立ちながら吾々はカントの説を超えて行かねばならぬものである。

理論物理學の基礎と考へられる「物理學的世界形像」は感覺の機能の特殊の性質を顧ない點に於てカントの考へと全く同様である。それほたとへ知覺の直接の結果と客觀的に現實されたる者との矛盾即ち錯覺の如きものがあるといふことは認めにしても、なほ外的關係がある見方では特に又空間的な順序の或る關係は吾々の感能によつて、

直接に知り得ると考へる。併し元來外的關係に對して吾々の知覺は決して充全であるとは考へられない。「連續の關係」やそれに基く測定と雖も絶對的に充全であり得ないといふことは少くとも正確さの「闕」なる感覺生理學上の事實から見ても明かであらう。それ故吾々はかゝる外的關係を直接に認識することは出来ない。たゞ出來るだけ正確に認識し得るといふに過ぎない。それ故物理學のかゝる世界形像はなる程實際上には何の危險も含まないといふ點では許され得るにしても終局的な充分な見方とは云はれない。觀察に基く全經驗認識の論理的基礎を嚴密に論ずる場合はそれ故常にかの「全體的な世界形像」の考へに還らねばならぬであらう。さてヘルムホルツの如く *Gleichheit* を *physische Gleichwertigkeit* と解してのみ吾々の經驗認識に對してその意味を見出し得ると主張する自然科學的空間説は空間表象の心理的性質を忘れた

點にその誤謬の源があると思はれる。實在する對象の合同を云々する時物理的な合同の外に尙何物か考へられてゐると云ふにしてもヘムホルツによればそれは「認識し得るもの」に就いては何の變りもないと謂ふのであるが、併しこのことは合同の概念に物理的の合同以外のある他の意味があるといふことを否定することゝはならぬであらう。自然科学的空間説を困難ならしめるものは空間表象が何等固定した完結した者を意味しないといふ事實である。それ故觀察すべき出來事を理解するには吾々は實在界の空間的な表象を全然捨て去つて、全然抽象的な數學的な形式に據らねばならぬ。かくしてのみ吾々は眞に終局的な實在認識としての「全體的世界形像」に到達し得るのである。然らば時間表象はどうであるか。物理的世界形像が假定する處の吾々は外界を直接に認識し得るといふことから、自然科学は認識に現はれないものを取

扱ふことは出來ぬといふことが引き出されるのであるが相對性原理は正に之によつて成立する。而してミンコフスキーは抽象的な四次元座標をとつて三つを空間に一つを時間に配した。即ち之によれば世界形像から時間表象が除外されて抽象的な軸によつて置き換へられるのであるからそれは恰も吾々の主張に一致するかの如く見えるであらう。併しカントも云ふ通り時間は外界の關係が與へられる形式であるのみならず心理的體驗の形式である。それ故時間そのものを含まない物理的世界形像はなほ斷片又は部分に過ぎぬであらう。ミンコフスキーの世界は終局的な全體的な世界形像とは考へられないと思ふ。それ故又併し時間表象は世界形像から或る範圍に於て除かれることが出來るといふことは謂はれ得るであらう。之を要するに吾々の實在認識の最高課題は事實を統一する合法的な順序を見出すことである。即ち一般的

な命題を見出すことである。而もかゝる一般的な命題はたゞ吾々が全體的世界形像と呼ぶ處の、實在の關係をある一定の「概念的な材料」の内で考へることによつて始めて可能である。即ち空間表象や又はある範圍では時間表象を除き去つた客觀的に實現されたるものとしての時間及び空間からなる處の時空世界形像によるのでなければならぬ。而もかゝる時空形像は座標と云ふが如き抽象的な概念によつて置き換へても何の變りもある筈はない。それ故實在は嚴密に數學的な概念によつてのみ理解し得るであらう。

カントが時間及び空間を吾々に個有な性質によつて與へられた表象形式でありそしてそれに特有の性質によつて一義的な必然的に明白な命題が成立すると説いた事は反對すべくもない。併し近代の科學に於て變更された處は實在的對象の空間的な秩序や實在的な出來事の時間的な秩序を認識

する仕方にあるであらう。即ち相對性原理の教へるやうに吾々は客觀的に與へられた關係を直接に知り得るのではなく有限な速度の光線を介して認識するのであるが之は從來の實驗物理學の信念と相容れない處であらう。併しカントの精神に従つて築かれたる認識論によれば客觀的な關係の嚴密な意味での直接な認識はあり得ない。それ故此變更によつてカントに基く認識論は少しも動搖するものではない。たゞカントは吾々の空間的な知覺が個々の如何に決定されてあるかを問題としなかつたまであり吾々はたゞ之を補へば足りるのである。之に反して物理學の最近の發展は實在の思惟の形式から空間表象を又ある範圍では時間表象をも除き去つて抽象的な或ひは間接的な意味を有する座標を以て置き換へたといふ點に於てカントから離れると云はねばならぬ。併し之とても實在認識とはある關係を吾々に個有な主觀性に與へ

られた形式によつて云ひ表はすことであるといふカントの根本精神に基くものと考へられる。たゞ眞にカントを離れる點は數學的概念を茲に應用するに際して多數の形式が可能であり又事實要求されるといふことに外ならぬ。即ち就中空間乃至時間的な規定を抽象的な量概念によつて置き換へたが如きことはその一つであると考へられる。要するにカントと近代の物理學との多くの矛盾は實在認識の持つ二重の性質から説明出来るであらう。即ち直接の知覺と知的な思惟上の理解の仕方との二つである。カントは後者を眼中を置かなかつたのであるが恰も之が近代の物理學の發達に相當するものでなければならぬ。併し又物理學が「直接に認識し得る」といふ誤謬に陥り易い時之を警戒するものはカントの時間及び空間の表象の思想でなければならぬ。

### 三、因果律

カントと現代の科學

カントは第二比論に於て「繼起する(存在し始める)ものは總て、それが或る規則に従つて結果する處の何物かを豫想する」といふのであるが、かゝる因果關係に於て特に一つのをとり出してそれを原因と考へることは作爲なくしては不可能である。そしてこのことは一義的な客觀的意味を持つことは出来ない。吾々は寧ろある出來事に對して充足な理由をそれに先行する状態の全體の内に認めねばならぬ。或ひはかく云へばある一定の原因に常にある一定の結果が伴ふといふことは云へなくなるかの如く見えるであらう。併し因果律の重心は法則又は一般性の内にあるのである。それ故因果律を一般的に云ひ表はせば「ある瞬間に與へられたる關係 Verhalten とこの關係のその時點に個有な變化との間に合法的な即ち一般的に見出し得る關聯が成立する」と云つてよいであらう。私は之を因果律の發生論理的 nomologisch な解釋

と名ける。然らばかゝる關聯は如何なる論理的な形式で云ひ表はされるのであるか。それは「同一の條件の下には同一の結果が起きる」といふ事である。併し實在界の全體が反覆出來ない以上、これは勿論ある一定の範圍に於ては同一の條件の下に同一の結果が起きるといふことである。併しかくしても同一の條件が繰りかへし得るといふことは嚴密な意味に於て云ふことは出來ない。普通類似の條件の下には類似の結果が起きると云はれるのであるが、類似といふ如き徵標が甚だしく主觀的な要素に依存するものである以上この云ひ表はし方は終局的なものとは考へられない。今出來事を一つの函數と見るならば函數を云ひ表はす方式は無數の場合に就いて夫々異つた何物かを與へるものである事は、云ふまでもない。函數關係は無數の個々の場合を統一的に云ひ表はすと共にその表現の内容と意味とは個々の場合の個別的な關係

によつて決定されるものに外ならぬ。それ故函數の力を借りることによつてのみ以上の困難は除かれ得る。因果律は「あらゆる時點に於て與へられる關係とその時點に個有な變化との間には合法的な關係がありそれがこの變化をこの關係の函數として一義的に決定する」ものとして表現されるのである。私は之を因果律の發生論理的函數的な解釋と呼ぶ。

因果律の發生論理的な解釋に對して作用とか力とかといふ概念によつて因果律を規定しやうとする考へ方もあるのであるが吾々はかゝる作用或ひは力を直接に知覺することは出來ないのであるから、もしそれがある關係を簡單に云ひ現はす説明法としてゝないならば、それは吾々の認識の範圍を越えたものと云はねばならぬ。吾々の認識し得るものは何と云つても法則の概念による發生論理的解釋をとらせる。尤もキルヒホッフなどが力學

をば現象を「完全に最も簡単な形式で記載する」ものと定義して力や作用の概念を排斥したことはこの法則の概念に不當な附加物をさし入れることゝなるであらう。元來「完全に」といふもそれは吾々の認識能力の外に横ることである。「簡單」といふも力學は云はゞ直接に知り得る事實を簡單に云ひ表はすことをどり扱ふのではなくして直接に與へられたるものを超えて一般化することであるからこの「簡單」は實は法則に歸するものでなければならぬであらう。併し因果律を以上の如く解釋してもそれは吾々の自然認識の一般的な形式を示すだけであつてそれによつてはまだ事實に對する因果律の意味は盡くされてゐない。合法的に秩序づけられることを指し示す論理發生的解釋の外には因果律の「本體論的」な規定が残されてゐる。吾々はたとへ嚴密な意味での法則に達しないまでも繼起に就いて因果的と呼ばれるある秩序を近似値

的に見出し得るであらう。俗に之をもなほ法則と呼ぶならばそれは「Geschehenの法則」と呼んでよいであらう。

併しある個々の對象や出來事がある一定の結果の原因であると見る考へ方は獨り日常の知識のみならず科學的な認識に於ても行はれる處である。吾々は何かある一定のものを特別の意味に於て原因として掲げる。即ち主なる原因として掲げる。そしてそれ以外の關係を條件と名けるのである。併し何れを主原因とするかは嚴密に客觀的に與へられるのではなくたゞ主觀的な觀察の仕方が決定するものに外ならない。例へば特に重大なもの、即ち異常なるもの、新しく這入つて來たもの、法上の不法行爲等が特に原因と考へられる。この場合もしそれが無かつたならばこの結果は起きなかつたであらうと思はれるものが選ばれるのである。このやうな考へ方は勿論嚴密な概念に到達す

ることは出來ぬとしても主なる關係を順次に追求することによつて問題を明瞭に解決し得ることゝなるであらう。

さてカントが繼起するものは總てそれがある規則に従つて結果する處のものを豫想すると云ふ時繼起の全體の個々の出來事に又先行するものゝ全體が個別的に區別されうる個々の關係にはごしうるといふことを暗々裡に豫想してゐる。それ故茲にはかの函數概念が見失はれて了ふ。併し之に反してカントの因果律の重心が規則の概念にあるとすれば私が發生論理的解釋と呼んだ處のものは少くとも茲に考へられてゐるわけである。吾々が超越的な不可認識の概念として排斥した作用の如き概念はカントに於ても除外されてゐるのであるから。

因果律は時間表象を本質的な缺くべからざる要素として含むことはすでに明かである。(そしてそ

れ故時間空間的世界形象から抽象的な世界形象に移るにはある限界があるといふことが明かとなつた)。而して時間の形式は吾々に個有な精神の性質によつて與へられる實在認識の形式である以上吾々の體驗は總て時間的でなければならぬ。而も吾々は因果律に相當する規則又は秩序を持たぬ處の體驗の過程を表象し得るであらう。それ故因果律を強制的に確信することは不可能であるかも知れない。併しそれと共に因果律が成立しないといふことを強制的に意識することも出來ない。何となればそのためには同一の條件の下に同一ならざる結果が起るといふことを證明せねばならぬのであるが恰も吾々は條件を嚴密に残りなく見渡すことはすでに述べた如く不可能であるから。因果律の確信を持つことが出來ぬといふことはそれが妥當しないといふことから嚴に區別されねばならぬ。

因果律にはそれに特有な論理的な位置がある。吾

々はそれを特殊の自然法則と同一視することは出来ぬ。ヘルムホルツも云ふやうにそれはあらゆる自然認識の場合になされねばならぬ豫想である。と云はねばならぬ。カントが主張する因果律の先験性は正にこの妥當性に外ならない。普通精神は自由の領域と考へられるが茲にも因果律が行はれることは精神をも死せる自然と齊しく見得る限り許されうる。まして生命現象の自然科學的研究に於ては因果律がそのまゝ行はれねばならぬ。ドリーシュ等の主張する活力説と雖も因果的な考察に矛盾するものではない。成程因果律の嚴密なる形は總ての瞬間の出來事はそれに直接に先行する瞬間から一般的な法則に従つて起きるといふことであり、そしてかく一般的な法則に従ふといふことを習慣上 Mechanismus と呼ぶのであるがそれは決して空間内の物體の運動を理解する仕方のかの、 Mechanismus ではない。而も活力説はたゞ後者と

相容れないといふまで、あつて前者とは何等矛盾するものではない。それが矛盾すると考へられるのはメハニスムスの二義を混同することに基くものである。活力説に於ても因果律は妥當せねばならぬ。併し因果律は數學的であることを述べたが、かゝる數學的函數關係はそれとは全く異なる活力説の概念材料に如何にして結び付き得るのであるかもし因果律が函數關係としてのみ妥當することを許されるものであるならばこのことは到底不可能と云はねばならぬ。それ故今や吾々は因果律の數學的な概念に對してのみ可能であるやうな形式上嚴密な妥當性をもはやあらゆる經驗の不可缺の特徵であると云ふことは出來ないであらう。ある點でかの最高の嚴密さを缺いた經驗否全然之を含まない經驗といふことも考へ得ると思ふ。物理學に於ける量子論なども之であると考へられる。

近代の自然科學が因果律に對してそれに個有な

特殊の位置を與へたといふことはカントの立場とよく一致することである。たゞカントがその證明をば、吾々は到る處過去の經驗なくしても因果律が妥當するかの如く事實上振舞ひ得るといふ事實に求めたことは、時間及び空間の表象に於けると同じくカントの精神が純論理的な見地に立ちながらもなほカントが妥當の問題と心理發生論の問題とを完全に區別しなかつたことを示すものである

#### 四、生物の目的論的考察

吾々は目的と云へば第一に思惟するものによつて欲せられたもの目論みられたものを考へる。即ちそれは意志の概念に歸する。併し勿論之は生物の目的論的考察の對象とはならない。第二に考へられるものを私は「假の合目的性」と呼び得るのであらう。即ち有機的な組織は常に一定の結果を現實するやうに出來てゐて一定の目的のために組み立てられてある「かの如く」見えるといふことで

ある。この假の合目的性を如何にして説明し得るかば生物學の研究する處であるが併し之は一般的な自然科学的な研究の範圍の外にある者である。何となれば之は因果的合法則性に於てのみ説明されるものに外ならぬのであるから。この生物學的合目的性はなる程活力説を促すではあらうが併し因果的な考察に對して目的論的考察を對立せしめる理由は持たぬであらう。之に反して以上のやうに他の概念に歸する見方を全く離れて自立的な終局的な意味がこの目的概念に求められるかどうかを見る時吾々は全く別の事柄に逢着する。かくの如く目的概念に獨立の意味を許す考へ方は往々行はれる處であり、それは因果的な見方と目的論的な見方とを對立せしめ、更に次の如く云つて兩者を結び付ける。即ち吾々は繼起の過程をば任意に前へも後へも辿れるのであつて後の出來事が前の出來事に依存すると見るのが因果的な見方であり

之に反して前の出來事を現在の即ち後の出來事に依存すると見るのが有極的な *Final* 見方であるとする。併し因果的に見るといふことは後のものを前のものゝ函數を現す法則として見ることに外ならぬのであるが思ふにかゝる法則は獨り後のものを前のものゝ函數として現はすのみならず又前のものをも後のものゝ函數として一義的に決定するものでなければならぬ。それ故實は繼起は前へも後へも同様に、辿れるものなのである。現在から未來へ辿る所謂因果的な見方がそれに對立する見方よりもより多く行はれるといふことは全く未來が吾々にどつて全く未知であるから特に興味を惹くといふことのために過ぎない。何れも同じ因果的な土臺の上に立つと云はねばならぬ。勿論結果を惹き起す *Verursachung* などいふ概念を用ゐるならば二つの見方が同一の土臺の上に立つとは云ひ難いであらうが前にも述べたやうにかゝる概念

は合法則性の記載的な意味を超越したものである以上、かゝる概念に基くと考へられる目的概念は科學から之を捨て去つて了はねばならぬ。かくして自然科學にとつては目的論の成立する餘地はないのである。

それ故カントに於て見出されるこの問題が實際に大きな意味を持つものとは考へられない。この點に就いては現代の科學の見方とカントの思想との關係に多くの興味を繋ぐことは出來ぬと思はれる。たとへカントの一般的考へ方にとつてこの問題が重大であるにしても之を時間空間の問題に於てのやうに精細に取り扱ふ理由は見出せないと思ふものである。

自然科學的實在論的考へ方と哲學的批判的考へ方とがあるとするればこの對立が學の發達の曉に於て止揚されるといふ望みは少ないであらう。前者は後者なくしても少くとも自然科學を實際に満足

### 景報

#### 倫理學會例會

十月二十四日(金)午後六時より學生集會所に於いて例會開催。

古代歌謠に現はれたる貞操觀

澤瀉 久孝

#### 教育學研究會

十月二十三日(木)午後七時より學生集會所乾室に於いて

歐米の新教育

府立二中 熊木 捨治

#### 金曜會例會

十一月五日(水)學生集會所に於いて例會開催

カントの目的論(本誌第九十九、百、百一號)

につき田邊先生より種々の御話しあり極めて有益なる集りなりし

### 寄贈書籍雜誌

#### 嘆佛偈講話

金澤 香 草 社

曉 烏 敏

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、日本心理學雜誌、倫理教育研究、觀想、教育研究、内外教育評論、學校教育、教育時論、藥王樹、三田文學、信濃教育、東亞之光、教育學術會、東洋思想研究、都市教育、社會學雜誌、講座、

せしめ得るのであるから。併し實際上の問題を離れて認識論的見方に立つ限り兩者の對立を止揚する事が吾々の願ひでなければならぬ。私はこの論文に於て之を試みたこと云ふことも出来るであらう。分裂しがちな人間の認識と研究の總體を不離の一者に結び付けた人の尤なる者、カントを記念する日こそこの試みに最も應しくはないであらうか。

× × × × × × × ×

一九二四・二・七一